

紹介

沖森卓也編

【図説】日本の辞書

佐藤 信 一

凡例によると「本書は、日本の辞書およびその歴史を概説した第一部と、主要な辞書を簡潔に解説し、その図版を掲出した第二部からなる」著述である。本学の山本真吾氏も項目を担当している。目次を掲出する。

凡例

第一部 日本辞書概説

1 辞書の定義と分類

2 日本における辞書の歴史

第二部 主要辞書解説

1 新訳華嚴経音義私記

2 新撰字鏡

3 本草和名

4 和名類聚抄

5 類聚名義抄

6 大般若経字抄

7 法華経单字

8 色葉字類抄

9 字鏡抄

10 聚分韻略

11 倭玉篇

12 下学集

13 節用集（古本節用集）

14 温故知新書

15 塵添墟囊抄

16 日本寄語

17 落葉集

18 日葡辞書

19 片言

20 訓蒙図彙

21 真草二行節用集

22 合類節用集

23 和漢音釈書言字考節用集

24 早引節用集

25 和字正濫抄

26 和漢三才図絵

27 唐音和解

28 雑字類編

29 俚諺集覽

30 物類称呼

31 和訓栞

- 32 雅言集覽  
 33 訳鍵  
 34 和蘭字彙  
 35 英和英語彙  
 36 英和对訳袖珍辞書  
 37 英華字典  
 38 和英語林集成  
 39 語彙  
 40 附音挿図英和字彙  
 41 和漢雅俗いろは辞典  
 42 言海  
 43 日本大辞書  
 44 大日本国語辞典  
 45 大字典  
 46 大漢和辞典  
 47 広辞苑  
 48 日本国語大辞典  
 49 新明解国語辞典  
 50 大辞林
- 参考文献  
 書名・人名索引

目次を見れば明らかのように、日本における主要な辞書が網羅されていると言えよう。これらの項目の中で、山本氏が執筆されているのは、第二部の「1 新訳華嚴経音義私記」、6 大般

若経字抄」、7 法華経单字」、10 聚分韻略」、14 温故知新書」、15 塵添墟囊抄」、31 和訓栞」、45 大字典」、46 大漢和辞典」、48 日本国語大辞典」であるが、それらを見る前に「第一部 日本辞書概説」(沖森卓也氏執筆)を見ておきたい。

ここでは「1 辞書の定義と分類」、2 日本における辞書の歴史」と章立てられ、さらに細かく節が改められている。1節「辞書の定義とその範囲」では、辞書が「ある基準によって選ばれた語彙について説明を加え、引きやすいように一定の順序に配列した書物のこと」と定義され、「①誰が、②どのような時に、③どのような目的で使用するかによって」辞書の性格が異なるとしている。

ついで2節「辞書の分類」では、一般に馴染んだ「辞典」「事典」「字典」という3分類を揚げ、「辞典」を「コトバ典」ともいう「語句の意味内容や用法を記述したもの」として、国語辞典をその代表的なものとして捉えている。また、「事典」は、「コト典」ともいう「事物や事柄を表す語について解説したもの」として、百科事典のようなものがあたるとしている。さらに、「字典」は、モジ典ともいう「漢字に関するものでは漢和辞典がその代表的なもの」とし、さらにいくつかの分類法を紹介する。

さらに3節「日本語辞書の分類」として、日本語で見出し語を立て、日本語で説明したものを、「日本語辞書」と位置付け、内容上の分類を試みている。附録として「国語辞典の見出し語数」を載せる。

「2 日本における辞書の歴史」になると、「1 8世紀まで

(奈良時代以前)、「2 9世紀から12世紀まで(平安時代)」、「3 13世紀から16世紀まで(鎌倉・室町時代)」、「4 17世紀から19世紀中ごろまで(江戸時代)」、「5 19世紀中ごろから現代まで(明治以降)」と分けて、各時代毎に代表的な辞書を紹介している。その中で「第二部 主要辞書解説」に解説があるものには「\*」が附されている。つまり、日本の辞書全体の歴史の中で、つねに位置付けを確認できる仕組みになっているのである。この書物を繙くことによつて、辞書の歴史を大きく捉えながら、各々の辞書の情報をも熟知し得るのである。

次に「主要辞書解説」に移りたい。各項目のそれぞれに「概観」、「成立」、「内容」、「諸本」、「図版解説」、図版が掲載されている。「概観」では、その辞書の基本的な解題、及び、位置付けがなされている。例えば「1 新訳華嚴経音義私記」では、「我が国で編纂された音義としては現存最古」、「6 大般若経字抄」では、「和訓の注に片仮名を初めて用いた文献として著名」といった具合である。

【成立】は、作者、及び成立事情の考証がなされている。その点で興味深かったのは「6 大般若経字抄」である。これは玄奘訳の「大般若経」の卷音義であるが、編者として藤原公任が挙げられていたのが、面白かった。藤原公任とは「和漢朗詠集」の編者であり、和歌と漢詩両者に涉つて拘わる人物であるうからである。

【内容】では、それぞれの辞書の特徴のある内容に焦点を当てた記述がなされている。「14 温故知新書」では「出典文献を注記したものが散見」され、「文選読みや古訓なども多く載せ」

ているとされており、興味深い。「15 塵添塵抄」では索引の紹介とともに本書と出典である「塵囊抄」、「塵袋」の比較表・項目対照一覧・事項索引を所収する文献が紹介されていて至便である。「46 大漢和辞典」でも、用例が博搜されていることを述べた上で、「ただし、仏典の漢語はやや扱いが軽く、また、日本側の文献しか挙がっていない漢語も中国撰述書に用いられないわけではないので、直ちに用例を見て和製漢語と判断することはできない」と、注意点を喚起する。「48 日本国語大辞典」では、「従来の国語辞典がともすれば古代語、中古語に重点があつたのに対して、明治期の語や用例も豊富に盛り込んでいる点」を特色と捉えている。

ただ、【諸本】は、これらの辞書自体、孤本が多いことから、諸本と言うよりも影印や翻刻の紹介と言つた側面が強いように感じられた。「45 大字典」の「現在では1988年(平成4)年」：「大字典」は絶版となつた」という記述に、「大字典」の恩恵に与る自分としては一抹の寂しさを感じた。

ところで、この書物の白眉と言うべきは【図版解説】ではあるまいか。ただ単にその辞書の代表的な箇所という基準で選ばれているのではなく、解釈の要とも言うべき部分が採られているように思われる。「1 新訳華嚴経音義私記」の条で、当該箇所が「華嚴経」の字句を摘記し、割り注で音・字体、和訓を注記していると言う概説の後に、「たとえば、『霧煙』の条の「上音牟川奇利」は、上字「霧」の音が「牟(ム)」で、「川」(川訓)は「奇利(キリ)」であると注する」とある。この「川」(川訓)というさり気ない注記に、それこそ「霧煙」ではないが、霧が

晴れる思いがした。「川」という旁わきでその漢字の略字のようになっているのである。永年古辞書を参照する際に抱いていた疑問が氷解した。「7 法華経单字」で、「妙」字に朱声点しゆが去声濁を示し、反切にも「无去 少平 反」と朱声点しゆが去れる」とある。「へウ」と訓みが示されているが、「妙」という字はべウと訓まれていたのか、声点の位置によって去声平声しゆが示されていたのかと理解できた。「31 和訓栞」の「最終行の「あ、」に冠する△印は、その見出し語の替わり目を示す」というのも納得がいった。

それから、些末なことであるが横書きで書かれているからか、読点（、）がカンマ（,）になつていることが気になつた。この書評に引用した部分に関して言えば、すべて読点に改めて引用したことをお断りしておく。とにかく専攻する時代の如何を問わず、すべての国語国文学科の学生必読の書であらう。

このように、まるで感想文のような紹介に終始したが、最後に一つだけ述べておきたいことがある。それは日本語の辞書であるのかかわらず、梵語（古代サンスクリット語）、漢語（古代中国語）、英語といった外国語を扱う辞書が過半を占めているということである。日本語と行うことを考える際に、外国語と対照させることは、あたかも己の姿を鏡に映してみるが如き、不可欠なものなのではあるまいか。

（A5版、おうふう、二〇〇八年一〇月刊、一四〇頁、一八〇〇円＋税）